

宮城県公立高等学校  
教育課程編成の手引

IV 各学科に共通する各教科  
【外国語】

令和元年6月

宮 城 県 教 育 委 員 会  
仙 台 市 教 育 委 員 会  
石 巻 市 教 育 委 員 会

## 8 外国語

### (1) 外国語科改訂の趣旨及び要点

#### イ 改訂の趣旨

今回の外国語科の改訂に当たっては、これまでの外国語教育の成果と課題を踏まえた改善が図られた。

##### 【成果】

- ・「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」を総合的に育成するための様々な取組を通して指導の充実が図られた。

##### 【課題】

- ・学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や学校種間の接続が不十分である。
- ・高等学校の授業においては、コミュニケーション能力の育成のための言語活動が適切に行われていない。「やりとり」や「即興性」を意識した言語活動や、複数の領域を統合した言語活動が適切且つ十分ではない。



##### 【外国語の目標設定】

- ・「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせ、外国語による「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動を通して情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図るために必要な学力の3要素を更に育成する。



##### 【新設科目】

- ・全ての科目を一新した。
- ・外国語でコミュニケーションを図る資質・能力を育成させるための言語活動を充実させる。
  - コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ  
統合的な言語活動を通して「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の五つの領域を扱う。
  - 論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ  
話すことと書くことによる発信力の育成を強化する。

#### ロ 改訂の要点

(イ) 科目構成の改善 **新設科目**及び**標準単位数**は以下の通り。下線は必履修科目。

平成 21 年告示学習指導要領	平成 30 年告示学習指導要領
コミュニケーション英語基礎 (2 単位)	<u>英語コミュニケーションⅠ</u> (3 単位)
<u>コミュニケーション英語Ⅰ</u> (3 単位)	英語コミュニケーションⅡ (4 単位)
コミュニケーション英語Ⅱ (4 単位)	英語コミュニケーションⅢ (4 単位)
コミュニケーション英語Ⅲ (4 単位)	論理・表現Ⅰ (2 単位)
英語表現Ⅰ (2 単位)	論理・表現Ⅱ (2 単位)
英語表現Ⅱ (4 単位)	論理・表現Ⅲ (2 単位)
英語会話 (2 単位)	

※科目編成において「英語基礎」がなくなったが、英語コミュニケーションⅠにおいては全ての学校で中学校段階の学習の確実な定着を図るための学習内容を扱う。

(ロ) 目標の改善

- ①五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指す。
- ②国際的な基準であるCEFRを参考に、五つの領域で外国語科の各科目の目標を設定した。

(ハ) 内容と科目構成の改善

外国語教育において育成を目指す三つの資質・能力を確実に身に付けられるように、小・中・高等学校を通じた領域別の目標の下で、内容等について以下のとおり体系的に構成を整理した。

- ①「知識及び技能」として「英語の特徴や決まりに関する事項」を整理。
- ②「思考力、判断力、表現力等」として「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」を整理。
- ③「言語活動及び言語の働きに関する事項」として「知識及び技能」を活用して「思考力、判断力、表現力等」を身に付けるための具体的な言語活動、言語の働き等を整理。
- ④「内容の取り扱い」において、中学校における学習の学び直しや、中学校における指導との接続に留意しながら指導すべき留意点等を整理。

(2) 外国語科の目標

第1款 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結びつけた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す。

※「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。

◎育成すべき資質・能力の三つの柱に応じて、三つの目標が設定された。

イ「何を理解しているか、何ができるか」

外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

- 新しい知識を確実に習得しながら、既存の知識や技能と関連づけたり組み合わせたりする。
- 獲得した個別の技能が自分の経験や他の技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる。

ロ「理解していること・できることをどう使うか」

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

- 「日常的な話題」・・・生徒の日々の生活に関わるもの
- 「社会的な話題」・・・社会的な話題や社会で起こっている出来事に関わるもの
- 取り扱う話題は中学校とは大きな違いはないが、高等学校ではより深く多面的・多角的な考察が求められることから、英語に関しても使用すべき語彙や表現などが高度化する必要がある。

ハ「どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか」

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

- 「知識及び技能」を実際のコミュニケーションの場面において活用し、考えを形成・深化させ、話したり書いたりして表現を繰り返すことで、生徒に自信が生まれ、主体的・自律的に学習に取り組む態度が一層向上する。

### (3) 外国語科の各科目

#### イ 各科目の特徴

##### (イ) 「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」

五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を総合的に育成する。

##### (ロ) 「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

三つの領域を中心に、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、まとまりのある文書を書くことなどを通して、英語を話したり書いたりすることによる発信力を高める。その際、言語活動は様々なレベルにおいて行うことができる。「聞いたり・読んだり」することは内容理解が目的ではなく、表現の仕方を学ぶためのものであり、「聞いたり・読んだり」したことを発信する際のモデルとして活用することに留意すること。

#### ロ 話題について

どの科目においても「日常的な話題」及び「社会的な話題」を扱う。

#### ハ 支援について

言語活動においては、生徒の状況を把握した上で、教師による学習の過程で考えられる様々な配慮が必要である。「支援」のあり方については、生徒の実態に合わせて、話す速度を落としたり、難解な表現を簡単なもの書き換えたり、やりとりについても教師がモデルを示したりするなどして、必要に応じて柔軟に工夫すること。その程度についても、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲと科目の段階が上がるにつれて、「多くの支援を活用すれば」→「一定の支援を活用すれば」→「支援をほとんど活用しなくても」となるよう調節すること。

また、ここでいう「支援」とは、英語で行う授業における「支援」であることから、生徒が理解できないから日本語に置き換えるといったものではないことに留意する。

#### ニ 使用する語句や文について

言語活動に用いる語句や文は、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲと段階が進む中で、「基本的な語句や文を用いて」→「多様な語句や文を用いて」→「多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて」となっている。「伝えたい内容は何なのか？」ということを具現化するために、その内容を適切に伝えるためにはどのような語彙や表現が必要なのかを考え、学んだことを引き出して高度化する指導が必要となる。

#### ホ 言語活動について

五つの領域における言語活動とこれらを結び付けた言語活動を行う。学習指導要領の解説には、それぞれの科目における具体的な活動例が示されているので参考にすること。

#### ヘ 履修について

(イ) 英語コミュニケーションⅠを**必修**科目とする。

(ロ) 英語コミュニケーションⅡおよびⅢは**選択履修**させる科目である。ⅠからⅢまでには**履修の順序がある**ので注意すること。

(ハ) 英語コミュニケーションⅡ・Ⅲは**分割履修**が可能である。

(ニ) 論理・表現Ⅰ、ⅡおよびⅢは**選択履修**させる科目である。ただしⅠからⅢまでには**履修の順序がある**ので注意すること。

(ホ) 英語コミュニケーションと論理・表現の**平行履修**は可能である。

#### (4) 各科目の内容

##### イ 英語コミュニケーション I

###### (イ) 目標

「英語コミュニケーション I」は、高等学校外国語科における**必修科目**である。中学校における「英語」の学習内容を踏まえた上で高等学校での学習への円滑な移行を考慮しながら、五つの領域別の言語活動および複数の領域を結びつけた統合的な言語活動を通して、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の五つの領域を総合的に扱う。

	日常的な話題	社会的な話題
聞くこと	話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、必要な情報を聞き取り、話し手の意図を把握することができるようにする。	話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、必要な情報を聞き取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができるようにする。
読むこと	使用される語句や文、情報量などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、必要な情報を読み取り、書き手の意図を把握することができるようにする。	使用される語句や文、情報量などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、必要な情報を読み取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができるようにする。
話すこと 【やりとり】	使用する語句や文、対話の展開などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けることができるようにする。原則としてここでのやり取りは即興で行う。	使用する語句や文、対話の展開などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、聞いたことを読み取り、聞いたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができるようにする。
話すこと 【発表】	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができるようにする。	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、聞いたことを読み取り、聞いたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができるようにする。
書くこと	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができるようにする。	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば</u> 、聞いたことを読み取り、聞いたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができるようにする。

(d) 内容

① 英語の特徴やきまりに関する事項

実際に英語を用いた言語活動を通して、小学校学習指導要領（平成二十九年文部科学省告示第六十三号）第2章第10節の第2の2の(1)、中学校学習指導要領（平成二十九年文部科学省告示第六十四号）第2章第9節の第2の2の(1)及び次に示す言語材料のうち、五つの領域別の目標を達成するのにふさわしいものについて理解するとともに、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につけることができるよう指導する。

【特に留意すべき事項】

a（言語材料として「句読法」を追加）言語材料を「英語の特徴やきまりに関する事項」として、「音声」、「句読法」、「語、連語及び慣用表現」及び「文構造及び文法事項」に分けて整理した。今回の改訂に当たっては、「句読法」を加えることにより、特に「読むこと」や「書くこと」における指導の充実を図った。

b（400～600語の新語を追加）中央教育審議会において、これまでの実績や諸外国における外国語教育の状況などを参考に実際のコミュニケーションにおいて必要な語彙を中心に小学校、中学校、高等学校のそれぞれで指導すべき語数を整理したのを受け、高等学校では「小学校及び中学校で学習した語に400～600語程度の新語を加えた語」を扱うこととした。

c（文法項目の改訂）意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用するという観点から、「接続詞の用法」「前置詞の用法」を新たに扱うこととした。一方で「代名詞のうち、itが名詞用法の句及び節を指すもの」及び「分詞構文」については必要に応じて扱うこととした。また、「仮定法」は中学における新設事項として追加された。

d（知識の活用を明記）ここで示される言語材料と後述の言語活動を効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につけることを明記した。

e（小・中・高の連続性への配慮を明記）小学校や中学校で学んだ語彙や表現などを、高等学校の言語活動で意味ある文脈の中でコミュニケーションを通して繰り返し触れることができるよう工夫し、言語の運用能力を高めることが必要であることを明確にした。

② 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項

思考力、判断力、表現力等の小学校・中学校・高等学校の段階的な発展を考慮し、高等学校では「具体的な課題等」の解決に向けた、英語を用いた言語活動の中で、「論理的に適切な英語で表現すること」を通して、日常的な話題や社会的な話題について、次の3点を身につけることができるように整理した。

- |   |
|---|
| ア 英語で聞いたり読んだりした際に、その内容を的確に理解できる能力                     |
| イ 得られた情報や考えを発信面での活動へと結びつけていき、五つの領域が密接に結びついた英語使用ができる能力 |
| ウ コミュニケーション本来の意義に則して、伝える内容をよく考え、それを伝え合うことのできる能力       |

### ③ 言語活動及び言語の働きに関する事項

	日常的な話題	社会的な話題
聞くこと	話される速さが調整されたり、基本的な語句や文での言い換えを十分に聞いたりしながら、対話や放送などから必要な情報を聞き取り、話し手の意図を把握する活動。また、 <u>聞き取った内容を話したり書いたりして伝え合う活動。</u>	話される速さが調整されたり、基本的な語句や文での言い換えを十分に聞いたりしながら、対話や説明などから必要な情報を聞き取り、概要や要点を把握する活動。また、 <u>聞き取った内容を話したり書いたりして伝え合う活動。</u>
読むこと	基本的な語句や文での言い換えや、書かれている文章の背景に関する説明などを十分に聞いたり読んだりしながら、電子メールやパンフレットなどから必要な情報を読み取り、書き手の意図を把握する活動。また、 <u>読み取った内容を話したり書いたりして伝え合う活動。</u>	基本的な語句や文での言い換えや、書かれている文章の背景に関する説明などを十分に聞いたり読んだりしながら、説明文や論証文などから必要な情報を読み取り、概要や要点を把握する活動。また、 <u>読み取った内容を話したり書いたりして伝え合う活動。</u>
話すこと 【やり取り】	使用する語句や文、やり取りの具体的な進め方が十分に示される状況で、情報や考え、気持ちなどを即興で話して伝え合う活動。また、 <u>やり取りした内容を整理して発表したり、文章を書いたりする活動。</u>	使用する語句や文、やり取りの具体的な進め方が十分に示される状況で、対話や説明などを聞いたり読んだりして、賛成や反対の立場から、情報や考え、気持ちなどを理由や根拠とともに話して伝え合う活動。また、やり取りした内容を踏まえて、 <u>自分自身の考えなどを整理して発表したり、文章を書いたりする活動。</u>
話すこと 【発表】	使用する語句や文、発話例が十分に示されたり、準備のための多くの時間が確保されたりする状況で、情報や考え、気持ちなどを理由や根拠とともに話して伝える活動。また、 <u>発表した内容について、質疑応答をしたり、意見や感想を伝え合ったりする活動。</u>	使用する語句や文、発話例が十分に示されたり、準備のための多くの時間が確保されたりする状況で、対話や説明などを聞いたり読んだりして、情報や考え、気持ちなどを理由や根拠とともに話して伝える活動。また、 <u>発表した内容について、質疑応答をしたり、意見や感想を伝え合ったりする活動。</u>
書くこと	使用する語句や文、文章例が十分に示されたり、準備のための多くの時間が確保されたりする状況で、情報や考え、気持ちなどを理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動。また、 <u>書いた内容を読み合い、質疑応答をしたり、意見や感想を伝え合ったりする活動。</u>	使用する語句や文、文章例が十分に示されたり、準備のための多くの時間が確保されたりする状況で、対話や説明などを聞いたり読んだりして、情報や考え、気持ちなどを理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動。また、 <u>書いた内容を読み合い、質疑応答をしたり、意見や感想を伝え合ったりする活動。</u>

#### 【特に留意すべき事項】

- a (読むこと) 音読を扱うことは妨げられていないが、音読は「話す活動」ではなく「読む活動」であることには注意が必要である。音読の指導の際には、その適切性や目的を生徒に意識させたうえで指導することが重要である。
- b (読むこと) 「論証文」とは、問題に関して自分の意見を明確にし、理由付けや具体例などの証拠を用いてその意見を支え、自分の意見が優位であることを主張する文である。「読むこと」において論証文に

十分に触れ、それを通して培われた論理性が、「話すこと [やりとり]」や「話すこと [発表]」、「書くこと」における論理的に表現する能力の土台となることに十分留意した上で指導することが重要である。

- c (話すこと [やり取り]) 最初から専門的で高度な話題でやり取りを行うのではなく、生徒にとって馴染みのある話題を選択したり、他の領域における言語活動で扱った話題を再度取り上げたりするなどの配慮を行い、生徒が既存の知識を十分に活用できる話題で伝え合う活動を継続的かつ段階的に行うことが必要である。
- d (話すこと [やり取り]) 「話すこと [やり取り]」においては即興性を重視する。事前の準備としては簡単なメモなどの作成にとどめるようにし、事前に書いた原稿を読み上げる活動に終始しないよう指導することが重要である。生徒が自分の意見や考えを即興で表現できる範囲を徐々に拡大できるよう、段階的な指導を図る必要がある。
- e (話すこと [やり取り]) 生徒の自らコミュニケーションを図ろうとする態度を養うために、教師が生徒とともにやり取りを楽しむ姿勢を示し、生徒のやり取りの例を全体で共有するなど、フィードバックの仕方にも留意することが必要である。
- f (書くこと) 段落で文章を構成していく際に、一つの段落で内容のまとまりを示している点では日本語と英語とで共通しているが、英語では多くの場合、一つの段落が書き手の伝えたい一つの主張とそれを支える部分から構成されている。こうした日本語と英語の相違点や共通点を生徒に理解させる必要がある。

#### (A) Q&A

##### Q1 「話すこと (やりとり)」で「対話の展開」における支援はどのように行えばよいか。

会話の展開例を示したり、会話がうまく続けられないときの対処法を示したりすることが考えられる。

##### Q2 「論理性に注意する」ことを指導する際に留意すべきことはどんなことか。

それぞれの文の内容が矛盾したり飛躍したりすることのないように、伝えたい内容の根拠や理由を示すことに注意を向けさせることが重要である。

##### Q3 高等学校で扱うべき新語の数が増えたが、これらを指導する際の留意点は何か。

語彙については、受容語彙(聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙)と発信語彙(話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙)の違いを踏まえたうえで、扱うべき語とされた400~600語は、全てを発信語彙とすることが求められているわけではないことに留意する必要がある。特に高等学校においては、中学までに既習の2,500語をできるだけ発信語彙として用いる機会を豊富に提供することが必要である。

##### Q4 「読むこと」で「電子メールやパンフレット」とあるが、それ以外の素材を使用することは適切ではないということなのか。

例示された素材にとらわれる必要はない。旅行案内や商品の広告、必要な情報を伝えるためにかかれた英文など、指導する目的や授業展開等に応じて様々な素材を扱うことができる。



## ロ 論理・表現 I

### (4) 目標

話すこと [やりとり]、話すこと [発表]、書くことの三つの領域を重点的に扱い、発信力の強化を大きな目標とする科目である。その際、論理の構成や展開において英語コミュニケーションよりもレベルを一段上げるのがこの科目の大きな特徴である。具体的には、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、1つの段落を書くことを通じて、論理の構成や展開を工夫して伝える又は伝え合うことができるように指導する。実際の活動においては、ペアやグループなどの形態を変えたり、話題を変えながら、活動を繰り返し行い既習項目の定着を図る。また、デモンストレーションやモデルとなる文章などを豊富に提示し、生徒がそれらを情報源としてだけでなく、モデルとして活用できるようにする。

	ア 日常的な話題	イ 日常的な話題や社会的な話題
話すこと 【やりとり】	使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを伝え合ったり、 <u>やり取りを通して必要な情報を得たりする</u> ことができるようにする。	使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、 <u>ディベートやディスカッションなどの活動を通して、聞いたり読んだりしたことを活用しながら</u> 、基本的な語句や文を用いて、意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して伝え合うことができるようにする。
話すこと 【発表】	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを <u>論理の構成や展開を工夫して話して伝える</u> ことができるようにする。	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、 <u>スピーチやプレゼンテーションなどの活動を通して</u> 、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、基本的な語句や文を用いて、意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して伝えることができるようにする。
書くこと	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを <u>論理の構成や展開を工夫して伝える</u> 文章を書くことができるようにする。	使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、基本的な語句や文を用いて、意見や主張などを <u>論理の構成や展開を工夫して伝える</u> 文章を書くことができるようにする。

#### ① 話すこと [やりとり]

目標のアにおける、やり取りを通して必要な情報を得たりするとは実用的な情報取得のことである。例えば海外旅行などの場面を想定している。また目標のイにおける、ディベートやディスカッションなどの活動は様々な方法で行うことが可能である。例えば、すぐにアカデミックディベートを行うのではなく、ペアでの賛成反対の意見交換などから始めることが大切である。つまり生徒の習熟状況に応じて、足場架けをしながらの指導が必要となる。聞いたり読んだりしたことを活用しながらとは、生徒が表現する際のモデルとして使用することも意味している。また話す目的が必要であるために、インフォメーションギャップがあるかということにも留意しなければならない。

#### ② 話すこと [発表]

目標のアにおける、論理の構成や展開を工夫して話して伝えるとは、論理に矛盾や飛躍がないか、理由や根拠がより適切なものとなっているかなどについて留意して伝えることである。また目標のイにおける、スピーチとは、あるテーマについて自分の考えや主張をまとまりのある形で述べる活動のことである。こ

ここでは、単に暗記した文章を復唱させるような活動のみならず、スピーチの内容を生徒自身が考え、整理して、聞き手に効果的に伝えることができるように指導することが必要である。またプレゼンテーションとは、聴衆に対して情報を与えたり提案したりする活動である。プレゼンテーションを行う際は、写真や実物、ポスターやスライド、タブレット端末などの視覚的な補助を活用することで聞き手の注意を引き、理解を深め発表をより分かりやすくすることも効果的である。

また発表時には事前に書いた原稿を読み上げるのではなく、できるだけメモや視覚的補助を活用し、即興性を大事にしながらかつ話し手と聞き手との質疑応答や感想の伝え合いを行うことも必要である。

### ③ 書くこと

目標のア、イにおける論理の構成や展開を工夫して伝えるとは、モデルなどを活用して論理の構成や展開の仕方を学んだ上で、論理に矛盾や飛躍がないか、理由や根拠がより適切なものとなっているかなどについて留意して書いて伝えることである。まずは1つの段落で書くことを始め、必要に応じて複数の段落へと発展させていく。

## (D) 内容

### ① 英語の特徴やきまりに関する事項

本科目では特に、英語で話したり書いたりする際の論理の構成や展開を理解し、それに応じて適切な表現を使えるように指導する。

○目的や場面、状況などに応じた論理の構成や展開

論理的に伝えることの基本は、主張をその理由や根拠とともに分かりやすく話したり書いたりすること。		
話すこと	スピーチやプレゼンテーション	相手の理解や賛同を得るために行う。
	ディスカッション	相手とのやり取りを通して課題解決などを旨とする。
	ディベート	自らの主張を相手の主張と対比させながら相手や聴衆を説得する。
書くこと	叙述文（物語や描写）	自分の過去の経験についてまとめた内容を伝える。
	説明文*	客観的な事実や情報を伝える場合に、要点を目的に応じた項目立てをしながら相手に分かりやすいように整理し、概念の定義や具体例などを適宜添えながら情報を詳細に伝える。
	論証文*	特定の意見や主張を掲げ相手を説得するための議論を展開するために、説明文に自分の主張を組み入れた形式。
*説明文や論証文では、序論・本論・結論の構成に従って書かれていることが多く、文章の種類に基づき効果的な段落の構成や論理の展開がある。段落の構成には、一般的に各段落の主題を述べるトピック・センテンスと、その内容を支える支持文（サポーター・センテンス）が含まれている。		

### ② 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項

この事項については、「英語コミュニケーション I」に準ずる。

### ③ 言語活動及び言語の働きに関する事項

	(ア) 関心のある事柄や学校生活などの日常的な話題について	(イ) 日常的话题や社会的な話題に関して
話すこと 【やりとり】	使用する語句や文，やり取りの具体的な進め方が十分に示される状況で， <u>情報や考え，気持ちなどを伝え合ったり，やり取りを通して必要な情報を得たりする活動</u> 。また，やり取りした内容を整理して発表したり，文章を書いたりする活動。	使用する語句や文，やり取りの具体的な進め方が十分に示される状況で，優れている点や改善すべき点を話して伝え合ったり，意見や主張などを適切な理由や根拠とともに伝え合う <u>ディベートやディスカッション</u> をする活動。また，やり取りした内容を踏まえて，自分自身の考えなどを整理して発表したり，文章を書いたりする活動。
話すこと 【発表】	使用する語句や文，発話例が十分に示されたり，準備のための多くの時間が確保されたりする状況で， <u>情報や考え，気持ちなどを適切な理由や根拠とともに話して伝える活動</u> 。また，発表した内容について，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活動。	聞いたり読んだりした内容について，使用する語句や文，発話例が十分に示されたり，準備のための多くの時間が確保されたりする状況で， <u>段階的な手順を踏みながら，意見や主張などを適切な理由や根拠とともに伝える短いスピーチやプレゼンテーション</u> をする活動。また，発表した内容について，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活動。
書くこと	使用する語句や文，文章例が十分に示されたり，準備のための多くの時間が確保されたりする状況で， <u>情報や考え，気持ちなどを適切な理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動</u> 。また，書いた内容を読み合い，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活動。	聞いたり読んだりした内容について，使用する語句や文，文章例が十分に示されたり，準備のための多くの時間が確保されたりする状況で， <u>発想から推敲まで段階的な手順を踏みながら，意見や主張などを適切な理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動</u> 。また，書いた内容を読み合い，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活動。

#### a 話すこと【やりとり】

(ア)における内容には必ずしも論理性が問われるものではない。情報や考え，気持ちなどを伝え合ったり，やり取りを通して必要な情報を得たりする活動とは例えば，ペアで互いにもっている情報が異なる状況（インフォメーション・ギャップがある状況）で活動を行ったりすることなどが考えられる。(イ)におけるディベートやディスカッションとは例えば，ロールプレイにおいて，異なる立場の意見や主張を理解する活動，ある主張に対して賛成と反対の立場に分かれて行うディベートや，聞いたり読んだりした内容について，自分の意見を理由などとともに述べて他者と意見を交換する簡単なディスカッションを行う活動などが考えられる。

ペアで意見を共有してから複数のグループのディスカッションを行ったり，ディスカッションで共有した多様な考え方を踏まえてディベートを行ったりするなど，意見の形成に必要な過程に配慮して進めることが必要である。その際，司会者の役割やディスカッションを進める手順などを明確にすることなども大切である。

## b 話すこと [発表]

(ア)における情報や考え、気持ちなどを適切な理由や根拠とともに話して伝える活動としては、例えば、次のように段階的な手順を踏みながら、実際の発表につなげるよう指導することが考えられる。

- ① 扱う話題について自分の意見や主張を整理して何について話すかを定める。
- ② 自分の意見や主張に説得力をもたせるための理由や根拠を考えた上で、発表のためのアウトラインを作る。
- ③ 発表する際に活用できる表現などを、発表内容や形態に応じたモデルとなる映像を見るなどして学ぶ。
- ④ 発表のためのメモや原稿などを準備する。
- ⑤ 発表の仕方に注意しながら発表の練習を行う。

(イ)における段階的な手順を踏みながら、意見や主張などを適切な理由や根拠とともに伝える短いスピーチやプレゼンテーションをする活動を行うための段階的な手順としては、例えば、次のような展開が考えられる。

- ① 聞いたり読んだりした内容を整理してまとめる。
- ② 自分の意見や主張をどのように聞き手に訴えたと効果的かなどについて留意しながらアウトラインを書く。
- ③ 意見や主張、理由や根拠などをどの順番でどのように説明するかなどを考える。
- ④ 伝えたいことを的確に伝えるためにモデルとなる発話例を参考にして、発表の内容や展開に使用する表現などを工夫する。
- ⑤ 発表の練習をする時間を取る。

## c 書くこと

(ア)における情報や考え、気持ちなどを適切な理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動とは、読み手にとって読みやすく分かりやすい文章になるよう、論点を整理し、理由や根拠の示し方などに留意して書くことである。また、段落を書いて伝えるとは、一つの段落で書いて伝える活動を指す。その際、必要に応じて複数の段落で書くことも考えられる。

日常生活においては、メッセージや電子メールを書いたり、スケジュールや必要な情報を記録としてメモしたりするような文章などを書く機会が多いことを踏まえ、ここでは、実際に生活の中で使っているICT機器などを活用して、多様な文を書く活動を取り入れることも考えられる。

(イ)における発想から推敲まで段階的な手順を踏みながらとは、例えば以下のような流れが考えられる。

- ① どのような内容を書くかについて、書く内容についてブレインストーミングを行う。例えば、ペアやグループで自分の考えや気持ちを話して伝える活動をした後に、その内容を書く活動を行う。
- ② モデルとなる段落で書かれた文章例を使って、アウトラインの書き方を練習する。その後、自分の文章の段落の構成を考えてアウトラインを書く。
- ③ モデルとなる文章例や生徒の作品などを活用して、意見や主張などを適切な理由や根拠とともに伝えるための表現などについて学ぶ。
- ④ 実際に文章を書いた後に、自分で読み返したり、他の人と読み合ったりして、内容について修正したり、書き間違いなどを訂正したりする。

意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して文章を書いて伝えることができるようになるためには、論理の構成及び展開の方法に関する段階的な指導が大切である。その際、文章の構成や、トピック・センテンスやサポーティング・センテンスなどの働きなどを、モデルとなる段落で書かれた文章例を活用して、生徒自身が分析しながら学ぶことが大事である。そのような分析を通して、どのようなトピック・センテンスが適切か、扱う話題に応じてどのような英文の種類を選択すると効果的かなどについて生徒自身が判断し、そのような知識や経験を、実際に自分が書く文章に生かすことができるようになることが大切である。

#### ※ 文法の扱いについて

文法事項を実際のコミュニケーションに生きて活用するための手段と捉える。そのために、伝えたい事が相手に伝わるような表現力の豊かな文章にするためには、どのような言語材料を活用すればよいのかという観点が必要である。例えば、単文がいくつも続くような単調さを避けるためには、副詞や接続詞を効果的に用いて、単文を重文にしたり、従属節を用いて複文にしたりすることで、多様な文を書く必要がある。その際、単文のみで書かれた一つの段落の文章例において、どの単文を接続詞でつなげるとよい表現になるか、どの文を複文にすると意味がわかりやすくなるかなどについて生徒が分析した上で、様々な接続詞を使って文を作る練習をするなどの指導が考えられる。

### (A) Q&A

#### Q1 論理・表現Iと英語コミュニケーションIの違いは何か。

論理・表現Iは話すこと [やりとり]、話すこと [発表]、書くことの三つの領域を重点的に扱い、発信力の強化を目標としているため、英語コミュニケーションIより論理の構成や展開などの点で、より高いレベルや質が求められる。

#### Q2 ディベートやディスカッションを行うのは教師、生徒双方にとってハードルが高いのではないか。

段階的に手順を踏んで指導する必要がある。ペアやグループでの意見交換から始め、多くの意見に触れながら、自分の意見を持たせる必要がある。その後、簡易的なディベートやディスカッションのフォーマットを紹介し、役割を変えながら繰り返し取り組むことが大切である。

#### Q3 論理・表現Iの教科書はどのような内容になるのか。

文法シラバスではなく、言語活動に基づく構成となる見込みである。現行の英語表現の教科書の第2部や第3部で取り上げられていたものが中心となると思われる。

### (5) 指導計画の作成と内容の取り扱い

#### イ 指導計画の作成概要

「生徒の英語力向上推進プラン（文部科学省、H27年6月）」では、高校卒業段階に英検準2級～2級程度以上の生徒を50%（「GOAL2020」）と設定している。それを受け、小学校及び中学校、高等学校で一貫した目標を実現するため、国際的な基準であるCEFR\*を参考に、五つの領域で英語の目標を設定した。各校では、生徒の発達段階と実情を踏まえ、卒業までの年次ごと及び科目ごとに、領域別の目標と関連付けられた学習到達目標（Can-Doリスト）を設定すること。また、目標の設定に即して作成されるシラバス及び年間指導計画による学習指導と学習評価はカリキュラム・マネジメントの根幹であることから、学校教育全体のPDCAサイクルに位置づけること。

\*CEFR (Common European Framework of Reference for languages; Learning, teaching, assessment) は、語学シラバスやカリキュラムの手引の作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、包括的な基盤を提供するものとして、2001年に欧州評議会が発表した。国は高等学校卒業時の指標としてB1レベル(英検2級に相当、「各資格・検定試験とCEFRとの対照表(文部科学省、H30年3月)」参照)としている。

## ロ 指導計画作成上の配慮事項

- (1) 具体的な課題等を設定し、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、目的や場面、状況等を意識して活動を行い、五つの領域(「論理・表現」は三つの領域)における実際のコミュニケーションにおいて、英語の発音や語彙、表現、文法などの知識を活用する学習の充実を図ること。

### Q1 1時間の授業の中で、各領域あるいは複数の領域の活動を行うべきか。

単元など内容や時間のまとまりを見通しながら、(1)「知識及び技能」の習得、(2)「思考力、判断力、表現力等」の育成、(3)「学びに向かう力、人間性等」の涵養が偏りなく実現されるよう、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが必要である。

### Q2 主体的・対話的で深い学びは、生徒のどのような活動を示しているのか。

「主体的な学び」は、生徒が学習の見通しを立て、学びを振り返り変容を自覚できる活動、「対話的な学び」は、自分の考えを広げ深める活動、「深い学び」は、生徒が考える場面と教師が教える場面の設定に配慮し、外国語科の特質に応じた「見方・考え方」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通して、より質の高い学びにつなげることである。

### Q3 これまでの授業実践は全て見直しとなるのか。

外国語科の指導を通して「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の育成に向けた授業改善が重ねられている。こうした実践を否定し、異なる指導方法を導入すると捉えるのではなく、そのような実践を着実に積み重ね、生徒や学校の実態、指導の内容に応じ、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点から授業改善を図ることが重要である。

### Q4 改訂による最も大きな違いは何か。

「話すこと」について、「やり取り」と「発表」の2領域が提示されたことである。これまでは「発表」の活動が強調されがちだったが、「やり取り」が追加されたことに鑑み、いかに豊かなやり取りを通して言葉の学習を促し、それを発表できるだけの力へと育てていけるかが重要である。やり取りから発表へ、発表からやり取りへと繰り返す柔軟な指導計画の立案が求められる。

- (2) 「英語コミュニケーションⅡ」は「英語コミュニケーションⅠ」を、「英語コミュニケーションⅢ」は「英語コミュニケーションⅡ」を履修した後に履修させること。また、「論理・表現Ⅱ」は「論理・表現Ⅰ」を、「論理・表現Ⅲ」は「論理・表現Ⅱ」を履修した後に履修させることを原則とする。

### Q5 「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」と「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は並行履修できるのか。

可能である。また、「英語コミュニケーションⅡ・Ⅲ」は分割履修可能である。

- (3) 多様な生徒の実態に応じ、年次及び科目ごとの目標を適切に定め、卒業までの指導計画を通して十分に段階を踏みながら、外国語科の目標も実現を図ること。

**Q6 多様な生徒の実態に応じた指導計画策定についての留意点は何か。**

「外国語を使って何ができるようになるか」という観点から、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして領域別の目標を設定した。すでに、生徒の発達段階と実情を踏まえ、年次ごと及び科目ごとの目標を、各学校が設定する「学習到達度目標」として具体的な形で設定しているが、領域別の目標と関連付けられた学習到達目標に改訂することが大切である。その際、各教科・各科目の相互の関連を図り、段階を踏んで、発展的、系統的な指導ができるよう考慮する必要がある。

**Q7 学校到達目標の設定にはどのような効果があるのか。**

「英語を使って何ができるようになるか」を生徒や保護者と共有することで授業のねらいが明確になり、生徒への適切な指導を行うことができる。また、「知識及び技能」の習得・活用が図られるよう、五つの領域にわたる総合的な資質・能力の育成を重視することが期待される。さらに、教師間で指導の共通理解を図り、均質的な指導を行うことで、面接やスピーチ、プレゼンテーションなどのパフォーマンス評価などにより、「英語を使って何ができるか」という観点から評価がなされることが期待され、指導と評価の一体化とその改善につなげることができる。

- (4) 英語を使用して考えを伝え合うなどの言語活動を行う際は、既習の語句や文法構造、文法事項などの学習内容を繰り返し指導し定着を図ること。

**Q8 繰り返し指導する場合に、どのような方法が適切か。**

言語活動を行う際には、新出の語句や文構造、文法事項などの言語材料のみに焦点を当てるのではなく、既習の言語材料を用いて、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し活用することで定着を図るようにすることが重要である。

- (5) 生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること。

**Q9 「授業は英語で行うことを基本とする」について、現行の学習指導要領と異なる点は何か。**

小学校の外国語活動を経験した児童の学習意欲を中学校での学びに生かすことが重要であることから、中学校においても同様の規定が盛り込まれた。そのため、それを経験した児童生徒の英語への学習意欲を、高等学校での学びに生かすためにも、引き続き「授業は英語で行うことを基本とする」。生徒が日常生活で英語に触れる機会が限られることから、教師が授業中に英語を使用することで、生徒の英語使用を促すとともに、英語による言語活動を行うことを授業の中心とする。英語を使用して自分自身の考えを伝え合うなどのコミュニケーションが中心となることから、生徒が積極的に英語を使って取り組めるよう、まず教師自身がコミュニケーションの手段として英語を使う姿勢と態度を行動で示していくことが重要である。

**Q10 生徒の理解の程度に応じた英語を用いる際に留意すべき点は何か。また、支援のために日本語を使用することは可能か。**

挨拶や指示などの教室英語の使用に加え、説明や発問、課題の提示などを生徒の分かる英語で話し掛けることから始め、徐々に新出語彙も入れる段階を踏み、授業が実際のコミュニケーションの場になるようにすること。その際、生徒の理解の程度に応じるために、発話の速度や明瞭さの調整、より平易な語句や文などへの言い換えなどの工夫を行う。特に、英語でのコミュニケーションが苦手な生徒に対しては、自分の考えや気持ちを表現する活動を、段階を踏み繰り返し行うことが大切である。授業は「英語に触れる機会」と「実際のコミュニケーションの場面」であり、そうした趣旨であれば、補助的に日本語を用いることも考えられる。その際、生徒の苦手意識を減らそうと、教師が英語による発話の直後に日本語の意味を付け加えるなどの安易な日本語使用は、逆に「英語に触れる機会」を奪い、自律的な学習者への成長を阻害する原因を作る可能性があることに留意する。

(6) 国語科と連携を図り、日本語と英語の語彙や表現、論理の展開などの違いや共通点に気付かせ、その背景にある歴史や文化、習慣などに対する理解が深められるよう工夫すること。

(7) 言語活動で扱う題材は、生徒の興味・関心に合ったものとし、国語科や地理歴史科、理科など、他教科等で学習した内容と関連付けるなどして、英語を用いて課題解決を図る力を育成する工夫をすること。

**Q11 国語科、地理歴史科、理科など他教科と連携する目的は何か。**

国語科との連携については、「思考力、判断力、表現力等」を「論理的に適切な英語で表現すること」を通して育成する観点から、論理の展開の仕方における両言語の違いや共通点にも目を向けながら英語指導に当たることとなり、言語的感性の涵養、英語使用に際しての気付きを促す上で有効である。また、地理歴史科に係る、地球環境、資源・エネルギー、人口・食料問題、居住・都市問題など、また、理科に係る、生態系バランスと保全などの話題を想起しながら、関連する英語の文章を読むなど、生徒の発達段階や知的好奇心を踏まえ、自分の考えや気持ちなど、相手に伝えたい内容を扱うことにより、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことができる。

(8) 障害のある生徒などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。

**Q12 高等学校における、障害のある生徒などについての指導内容・方法で留意すべき点は何か。**

外国語科の目標や内容の趣旨、学習活動のねらいを踏まえ、学習内容の変更や学習活動の代替を安易に行うことがないように留意しながらも、生徒の学習負担や心理面にも配慮する必要がある。見えにくさ、聞こえにくさ、道具の操作の困難さ、移動上の制約、発音のしにくさ、心理的な不安定、人間関係形成の困難さ、読み書き等の困難さ、集中を持続することの苦手さなど、学習活動上の困難さが異なることに留意し、個々の生徒に応じた指導内容や方法を工夫することが大切である。こうした点を踏まえ、個別の指導計画を作成し、必要な配慮を記載し、他教科等の担任と共有したり、翌年度に引き継いだりすることが必要である。

(9) ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材などの協力を得る等、指導体制の充実を図るとともに、指導方法の工夫を行うこと。

**Q13 ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材などの協力を得る目的は何か。**

積極的に「ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材などの協力を得る」ことが、「生徒が英語に触れる機会を充実」させ、「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ことに資する。

また、「社会に開かれた教育課程」の下、学習の質の向上を図るためには、学校、家庭、地域社会が連携し、それぞれの教育機能を発揮することで、3者が連携・協働して生徒を育てていくことができる。そのためには、各学校においては、家庭や地域の人々と教育活動の方向性を共有化し、具体的な役割や責任を明確にしておくことや、学校を支援するシステム構築に努める必要がある。

## ハ 内容の取扱いに当たっての配慮事項

(1) 言語材料の指導にあたっては、単に英語を日本語に、又は日本語を英語に置き換えるような指導とならないよう、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して指導すること。また、生徒の発達の段階に応じて、聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき事項と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき事項とがあることに留意すること。

**Q1 コミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して指導することとはどういう趣旨か。**

文脈から切り離された知識として理解させるのではなく、その知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能が身に付くよう指導することが必要である。



**Q2 意味を理解できるよう指導すべき事項と、表現できるように指導すべき事項とがあることに留意することとは、どういう趣旨か。**

言語能力には、受容能力（聞いたり読んだりして理解できる力）と発信能力（話したり書いたりできる力）があり、受容能力の方が発信能力よりも速く上達し、より高い水準の到達度に至る。そのため、授業で学ぶ言葉の全てを発信能力まで高めていく必要は必ずしもない。

(2) 音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできることに留意すること。

**Q3 音声指導の補助として発音表記を用いることができることは、どのような趣旨か。**

音声の指導については、視聴覚機器の活用や、ネイティブ・スピーカーの協力により、継続的な指導をしていくことが大切である。発音表記については、特に指導する表記方法に指定はなく、発音表記の詳細な指導に偏りすぎて生徒の過度の負担にならないよう配慮する必要がある。

(3) 文法事項の指導に当たっては、文法的な正しさのみの強調、用語や用法などの指導が中心とならないようにし、場面や内容と関連付けて整理するなど、実際のコミュニケーションにおいて活用できるように指導を工夫すること。

**Q4 実際のコミュニケーションで活用できるように指導を工夫するとは、どのような趣旨か。**

文法事項を、理解・練習・実際の使用のサイクルの中で定着させ、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することが大切である。文脈から切り離れた個々の文法事項の理解度を評価することなく、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定した上で、それぞれの言語活動に必要な文法事項を提示して、その活用の必然性に気付くような指導を行うことが重要である。

(4) 現代の標準的な英語によること。ただし、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮すること。

**Q5 「現代の標準的な英語」とは何か。また、様々な英語の取扱いに配慮するとはどのような趣旨か。**

「現代の標準的な英語」とは、特定の地域や集団において通用される方言などに偏らない英語のことである。その一方で、英語は世界で広くコミュニケーションの手段として使われている実態があり、語彙、綴り、発音、文法などに多様性があることに気付かせる指導が大切である。

(5) 話すことや書くことの指導に当たっては、目的や場面、状況などに応じたやり取りや発表、文章などの具体例を示した上で、生徒がそれらを参考にしながら表現できるよう留意すること。

**Q6 話すことや書くことの指導に特化している理由は何か。**

「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」や「書くこと」による発信技能の育成を図る指導において、デモンストレーションやモデルとなる文章などを豊富に提示するとともに、それらを活用して、課題を達成できるようにすることの重要性について示すものである。

(6) 中学校で身に付けた使い方を基礎として、辞書を効果的に活用できるようにすること。

**Q7 辞書の指導はどのように行えばよいのか。**

中学校学習指導要領では、「辞書の使い方慣れ、活用できるようにすること。」とされており、高等学校でも、効果的な辞書の使い方指導は、自律的な学習態度やコミュニケーションを図る積極的な態度を育成することにつながる。その際、未知語に出会うたびに辞書を使うのではなく、聞いたり読んだりする中で、どの語が文脈から推測可能であり、辞書を使ってどの語の意味を知ることが重要かを判断する能力を育成することも大切である。話したり書いたりする活動においても、自分の言語知識を駆使してコミュニケーションを行っていく中で、必要に応じて辞書を活用する能力を身に付けさせていくことに留意すべきである。

- (7) 生徒が発話する機会を増やし、協働する力を育成するため、ペア・ワーク、グループ・ワークなどの学習形態について適宜工夫すること。その際、他者とのコミュニケーションに課題がある生徒については、個々の生徒の特性に応じて指導内容や指導方法を工夫すること。

**Q8 ペア・ワーク、グループ・ワークなどの学習形態について工夫する際に留意すべき点は何か。**

生徒が発話する機会を増やし、協働する力を育成するために、互いに学び合える環境を整備することが重要である。ペア・ワークやグループ・ワークを行う際は、互いに興味・関心をもって話し合い、相互理解を深められるような題材や活動の在り方を工夫することが求められる。また、他者とのコミュニケーションに課題がある生徒については、日頃から関わることでできる生徒をペアの相手やグループのメンバーに配置したり、ALT等とペアを組んだりするなどの工夫をする必要がある。

- (8) 視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、生徒の興味・関心をより高めるとともに、英語による情報の発信に慣れさせるために、キーボードを使って英文を入力するなどの活動を取り入れることにより、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること。

**Q9 視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、生徒の興味・関心をより高めるとは、どのような趣旨か。**

写真や映像などを見せることで、理解を促進し、現実感や臨場感を与え、学びの動機付けを与えることができる。また、インターネット等を活用することで、学校外へと広がる、現実との結び付きの濃い発展学習を実現することができる。音声面でも、教師やALT等の使う英語だけではなく、様々な英語音声に触れる機会をもつことは、国際共通語としての英語に対する理解を深め、同時に自分自身の英語に対する自信を深めていく上でも大切である。

**Q10 キーボードを使って英文を入力するなどの活動を取り入れることにより、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るとは、どのような趣旨か。**

コンピュータや情報通信ネットワークの使用により、資料や情報の入手、電子メールによる英語での情報発信を通して、生徒が主体的に世界と関わろうとする態度を育成することができる。さらに、コンピュータや情報通信ネットワークが普及した現代においては、英語での情報発信に慣れさせるために、例えばキーボードを使った英文の入力などの活動を取り入れていくことが必要である。

- (9) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定し、言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すことにより、生徒が学習の見通しを立てたり、振り返ったりして、主体的、自律的に学習することができるようにすること。

**Q11 言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すことが、生徒が学習の見通しを立てたり、振り返ったりして、主体的、自律的に学習することができるようになることとどのようにつながるのか。**

各学校の学習到達目標を踏まえ、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを意識して学習できるように、どのような言語活動を行うのかを明確に示すことで、生徒が学習の見通しを立て、どのように上達したかについて自ら振り返りを行う主体的、自律的な学習態度の涵養が促される。更に、外国語を用いたコミュニケーションを充実させるために、授業外でも自主的に外国語を身に付けようとする自律的な学習を促すことも期待できる。

## 二 教材についての配慮事項

- (1) 五つの領域別及び複数の領域を結びつけた統合的な言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を総合的に育成するため、領域別の目標と内容との関係について、単元などの内容や時間のまとまりごとに各教材の中で明確に示すとともに、実際の言語の使用場面や働きに配慮した題材を取り上げる。その際、各科目の文法事項などを中心とした構成にならないように留意し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況など設定した上で、育成すべき資質・能力を明確に示すこと。

### Q1 領域別の目標と内容との関係について、各教材の中で明確に示すとは、どのような趣旨か。

教材は、「英語を用いて何ができるようになるか」という視点から、ある単元において、どの領域のどの目標に焦点を当てた指導をするとよいかを明らかにした上で、その目標を実現するためにどのような言語活動を行うのか、どういった言語材料を活用するのかを適切に関連付けた上で、各教材の中で明示することである。さらに、できるだけ関連性のある題材を通して「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を深めていく中で、言語活動を高度化していくことが望ましい。

- (2) 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし、次の観点に配慮すること。

- ア 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。  
イ 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。  
ウ 社会がグローバル化する中で、広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められる我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。  
エ 人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。

### Q2 四つの観点の趣旨は何か。

「真に思考力、判断力、表現力等を育成するような言語活動の比重が低い現状から、学習指導要領の内容の実現のために言語活動の改善・充実に資する生徒が発信したいと思える題材とする視点が必要である（平成28年12月の中央教育審議会答申）」ことから、生徒の発達段階、興味・関心について十分に配慮しながら、英語の目標に照らして適切であり、学習段階に応じた言語材料で構成されているような適切な題材を変化をもたせて取り上げる必要がある。